

博士学位論文審査要旨

2023年2月1日

論文題目： 存在の狂気
—反政治哲学としてのハイデガー—

学位申請者： 中井 大介

審査委員：

主査： 法学研究科 教授 市川 喜崇

副査： 大阪国際大学 名誉教授 古賀 敬太

副査： 法学研究科 教授 長谷川 一年

要 旨：

本論文は、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの哲学的営為（存在の思索）を「反政治哲学」として理解する試みである。

本論文はまず、汗牛充棟の観を呈する国内外のハイデガー研究を概観しながら、政治哲学の領域における研究動向を整理し、その多くがハイデガーをテキストの主権者と見なす「還元主義」に陥っていると批判する。そのうえで本論文は、ハイデガーによるヘルダーリン読解に倣いつつ、ハイデガーのテキストと言葉の動きを「戯れの空間」として捉えようとする。この点に本論文の第一の特徴がある。こうした読解の「構え」を通してはじめて、ハイデガー哲学の政治的意味を問うことができると主張するものである。

具体的には、前期ハイデガーの名著『存在と時間』はもとより、初期の神学論、中期のヘーゲルやプラトンに関する読解、そして悪名高い学長就任演説を経て、後期のヘルダーリン講義に至る数多くのテキストが検討対象とされており、さらに近年刊行された手記『黒ノート』にも目配りを忘れていない。この点に本論文の第二の特徴を認めることができよう。すなわち、本論文はハイデガーの長きにわたる思索の全体を一貫したパースペクティブの下に理解し、その政治哲学的含意を抽出しようとする姿勢において際立っている。とりわけ、難解をもって知られる『存在と時間』の議論を明快にパラフレーズし、非本来的な現存在が解釈学的実践を通して本来的自由に至るまでの理路を描き出す手際は鮮やかである。

本論文が最後に論じている詩人の言語の問題は、従来、政治哲学の領域におけるハイデガー研究では本格的に議論されてこなかったテーマである。この点に本論文の第三の特徴を認めることができる。詩的言語は、隠喩を駆使して既存の意味秩序を揺さぶり、民族固有の言語を「新生」させ、世界に新しい「始まり」をもたらす。本論文はここに思索者／詩作者ハイデガーの「反政治哲学」を、すなわち合理的な秩序構想を目指す従来の政治哲学とは異質な、新しい政治哲学の始まりを読み取ろうとするのである。

以上のように本論文は、先行研究とは異なる角度からハイデガーの思索全体を捉え直そうとするものであるが、その試みが野心的であるだけに、今後いっそう慎重に検討されるべき論点も浮かび上がってきた。第一に、ハイデガーは伝統的形而上学に対する徹底的な批判を通して、同時に既存の政治秩序を解体することを目論んだが、そうした破壊的な企ての後に「新生」される「政治」ないし「秩序」の内実は必ずしも明瞭ではない。それを実定的なものとして語るなら、再びハイデガーが批判するところの形而上学に陥るおそれがあるとはいえ、政治思想史研究によって蓄積されてきた語彙を最大限用いて説明する努力が必要であろう。第二に、本論文はハイデガー

の思索の一貫性を強調しており、一般に「転回」(ケーレ)と呼ばれる1930年代以降の思想変容を認めない。他方で、決断主義から静寂主義へというハイデガーの政治的態度の変化をいかに理解するかは、政治思想研究の分野では依然として重要な課題である。この論点をめぐる活発な議論が期待されるところである。

こうした若干の課題は残されているものの、そのことは本論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。よって、本論文は博士(政治学)(同志社大学)の学位を授与するに値するものであると判断する。

総合試験結果の要旨

2023年2月1日

論文題目： 存在の狂気
—反政治哲学としてのハイデガー—

学位申請者： 中井 大介

審査委員：

主査： 法学研究科 教授 市川 喜崇

副査： 大阪国際大学 名誉教授 古賀 敬太

副査： 法学研究科 教授 長谷川 一年

要 旨：

総合試験は、2023年1月27日(金)13時30分から15時30分にかけて実施された。学位申請者の口頭報告の後、質疑応答が行われ、ハイデガーにおける「政治」と「政治的なるもの」の関係、ハイデガーの「民族」概念とナチ的な「人種」概念の異同、前期ハイデガーから後期ハイデガーへの「転回」の意味等の諸論点について活発な議論が交わされた。いずれの論点についても、申請者は真摯かつ明快に応答し、ハイデガーの思想全般に深い理解を有していることが確認された。語学能力に関しては、申請者は本論文においてドイツ語および英語の専門文献を十分に読みこなしており、高度な語学力をそなえていると判断された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目：存在の狂気—反政治哲学としてのハイデガー—

Title of Doctoral Dissertation

氏名：中井 大介

Name

要旨：

Abstract

本研究の目的は、20世紀の哲学者マルティン・ハイデガーにおける存在の思索を、「反政治哲学」として位置付けるものである。具体的には、思索者／詩作者を巡る彼の議論を、言葉と時間性の視座から再検討することで、狂気の詩人たちが語る言語を、そして古代ギリシアとの対決を通じて遂行されたハイデガー自身の解釈学的実践を、日常世界の既存の意味秩序をラディカルに破壊し、世界の「新生」を準備する、言語的な実践であることを明らかにする。

本研究は全5章（+序論、結論）で構成されている。

序論では、存在論を巡る哲学史的な問題構制を概観した。伝統的な西洋形而上学は、存在論の亡霊に取り憑かれている。形而上学は存在を神話的＝存在者的に語ることで、むしろ存在を忘却してきた。これに対して現代の分析系哲学は、言語ゲームの外部（語りえぬもの）に対して沈黙を貫く。存在論を巡るこうした哲学史的状况を整理した上で、ハイデガーの哲学的位置を「反政治哲学」として特徴付けた。ハイデガーは詩人の語る狂気の言葉に、就中ヘルダーリンの詩作に存在の思索の極致を見出す。

第1章では、『存在と時間』の反政治的読解を通じて、現存在の本来性と非本来性の政治哲学的／反政治哲学的意味を検討し、現存在の本来的実践を解釈学的実践として明らかにした。すなわち、現存在の非本来性とは既存の政治秩序を成立させるための条件であり、他方現存在の本来性とはそうした意味秩序をラディカルに解体する契機を有している。解体と再生というかかる循環構造こそが、現存在の本来的自由としての解釈学的実践なのである。

次に第2章と第3章では、ハイデガーの文体論乃至テキスト論を検討することで、彼の存在の思索を、「書くこと」「翻訳すること」という実践において明らかにした。

第2章では、『存在と時間』が中断された理由を、中期のヘーゲル講義を手がかりに明らかにした。中断の理由は、テキスト内部の単なる論理的欠落にあるのではなく、時間性の不在にあった。絶対的な「始まり」には差異の傾きが必要である。しかし『存在と時間』において示された「存在論的差異」には傾きが存在せず、故にテキスト自体が絶対的な「始まり」に開かれていなかったのである。テキストの閉じた円環乃至体系を切断し、別の新たな経路（地平）を切り拓いていくこと、そうした解釈学的実践が『存在と時間』を中断させたのである。

第3章では、古代ギリシアとの対決を、具体的には、プラトン講義とアナクシマン드로ス論における存在と真理の思索を検討することで、全集序文に掲げられた箴言「（これらは）諸々の著作ではない、道である」の意味を明らかにした。ハイデガーは古代ギリシアの哲学的諸概念を新たな言葉で翻訳する。こうした翻訳作業は、過去の言葉を単に機械的・辞書的に置き換えるのではなく、原初の思索との対決を通して、ドイツに真に固有の言葉を、その将来において反復的に獲得せんとする解釈学的実践であった。それは序文の役割も同様である。テキストは書かれた時点で既に死んでいる。死んだテキストを新生させ、それらを複数形の「道」で再構成すること、換言すれば、各々のテキストがそれとは別の新たな経路に常に開かれていることを、全集序文は示していたのだ。

第4章と第5章では、ハイデガーにおける時間論と言語論を検討することで、彼の存在の思索

の極致を、詩人の狂気という言葉を通じた世界の「新生」として明らかにした。すなわち、第2章と第3章の主題がハイデガーの反政治哲学的な「実践」であるのに対して、第4章と第5章の主題はハイデガーの反政治哲学的な「理論」である。

第4章では、共同体における時間性の議論を検討することで、悪名高き「民族」概念の位置と意味をその時間性において明らかにした。頽落形態としての世人は、時間を忘却した現存在の非本来的な存在様態であり、それ故に新たな始まりの契機に、すなわち世界の新生をもたらす原初の思索からは疎外されている。これに対して、非本来性から本来性へと覚悟的に移行することは、三次元的な空間的共同性から四次元的な時間的共同性への次元的な変換を意味する。非本来性と本来性は単なる二項対立的概念ではなく、次元の位相における集合関係（非本性は本来性に含まれる）にあるのだ。そして、こうした本来的共同体は、到来において始まりを反復する共同体として提示される。ハイデガーにおける「民族」とは、既存の意味秩序をラディカルに破壊＝無化し、無意味から新たな意味を生起させる時間的共同体なのだ。

第5章では、詩人論乃至言葉論、とりわけヘルダーリン講義を中心に検討することで、かかる時間的移行が詩人の狂気という言葉によって準備されることを明らかにした。まず、デリダとラカンの議論を参照することで、言語の働きを「換喩」と「隠喩」において整理した。換喩が別の言葉を指し示す水平的な言語運動であるのに対して、「隠喩」は存在の出来事を語る垂直的な言語運動である。無意味から新たな意味を生起させる狂気の詩人の言葉は、こうした言語の隠喩性に存している。詩人は自覚的に下降に向かう存在である。それは太陽の熱のような散逸・摩耗を引き受けた者であり、世俗の人々に別れを告げた者である。そのなかで詩人は孤独に言葉を語る。それはあらゆる有機的組織化から隔絶された「器官なき身体」（アルトー）から、すなわち自己の存在の奥底から発せられた沈黙の叫びであり、本来的に自由で真に固有の言葉である。この言葉は、異国（古代ギリシア）との対決を経てはじめて将来的に反復される。こうした将来的反復の瞬間を、換言すれば、「新生」の瞬間を、ヘルダーリンは「祝祭」として歌っているのだ。

以上から、ハイデガーの存在の思索／詩作は、理想的な秩序構想を合理的に目指す従来の政治哲学とは全く異なるものであり、むしろこうした秩序構想自体を根底から破壊する可能性を有した「反政治哲学」として理解されなければならない。ハイデガーは、狂気の詩人の言葉を通して、存在の出来事を、無意味から新たな意味が到来する瞬間を捉えようとする。詩人の言葉は世界の「新生」を準備する。それこそが『黒ノート』において「メタポリティーク」と呼ばれるハイデガーの「政治」なのである。